



わが生い立ちの記

出生から終戦まで

財満 積次

まえがき

私は今年二月に満八十八歳になった。この時、私の生い立ちを思い出して書き残しておきたい、生まれた時からの歩みを振り返ってみたいと思ひ立った。

私の生涯の四分の一は戦争に明け暮れたように思う。物心ついた昭和の始め頃から日本の国は戦争を始めた。私の育った家は八本松駅の東五百メートルぐらいの所、山陽本線の鉄道の近くにあり、汽車が通る度に家が揺れるような所にあつた。四歳の頃からその家で生活をした。その頃から鉄道の近くまで遊びに行つて、祖父母に叱られたのを憶えている。

八本松の駅は山陽本線の中で一番高い所だと聞いていた。西条側から来る汽車が白い煙を吐きながら「ポポッシャシャ、ポポッシャシャ」と喘ぎながら来るが面白く見ていた。客車はあまり苦しまないで通り過ぎるのに、貨物列車はいかにも重たそうに喘ぎながら進んでくる。貨物列車は長く連なり、車両が幾つあるか、よく数えたのを思い出す。

そのうち、その貨物列車に兵隊さんが馬と一緒に乗つて手を振りながら、また日の丸に小旗を振りながら通り過ぎるのをたびたび見るようになった。子供ながらに兵隊さんが馬と一緒に乗っているのを不思議に思つた。大人はそれを見ると手を振つて「万歳、万歳」と言つていた。私たち、子供もそれに習つて手を振つていた。昼間はそうであるが、夜にそれは出来ない。それは兵隊さんが

戦争に行くのだと教えられ、戦争がどんなものか分からないままに幼年期を過ごした。後から支那の満州で戦っていたのだと聞いた。満州事変である。これからは上海事変、支那事変、第二次世界大戦と続く長い戦争をするのである。

私たちの世代はこのように戦争と共に成長したのである。今の世の中は平和で何不自由なく過ごせるのがあたりまえのようであるが、私らの世代は死ぬ事が当り前のような思いで過ごしたものである。学生生活、軍隊生活は厳しい生活で、今考えても良く耐えたと思う。それだけにあの時代の事を書き残しておきたいと思ひながらこの文を書いた。

平成二十二年二月



財満家

目次

一、夢枕	8
二、戸主	10
三、父の死	11
四、狐に騙された話	13
五、竹原での生活	15
六、音楽会とお灸	17
七、別れ	18
八、三輪車	21
九、小学校入学	23
十、活動写真	25

十一、再会	27
十二、お爺さんが死んだ	29
十三、小学校時代の思い出	34
十四、遠足	40
十五、水遊び	43
十六、通い帳	46
十七、修学旅行	48
十八、高等小学校に進む	51
十九、祖母の死	54
二十、受験	56
二十一、昭和十二年頃	59
二十二、師範学校の入学試験	62
二十三、春休み、母と会う	65
二十四、師範学校入学と入寮	69

二十五、寮生活と行事	72
二十六、年間の諸行事（寮・学校）	75
二十七、先生方のニックネーム	84
二十八、宮島杉の浦合宿水泳訓練	90
二十九、木曜ランニングと宮島マラソン	97
三十、兎狩り	100
三十一、戦争の足音が	102
三十二、軍事教育と教練	105
三十三、柔道	109
三十四、音検（おとけん）	115
三十五、火鉢祭り	118
三十六、戦争と学校	121
三十七、教育実習	124
三十八、一三期飛行専修予備学生志願	128

三十九、徴兵検査	132
四十、土浦海軍航空隊入隊	134
四十一、海軍航空隊の基礎教育	139
四十二、上陸	145
四十三、色々な行事	149
四十四、大井航空隊に転勤	155
四十五、大井航空隊の生活	156
四十六、飛行作業(航空訓練)	160
四十七、高知航空隊に転勤	167
四十八、高知航空隊の生活	172
四十九、軍事裁判	177
五十、曳船で航海演習(船の航海)	181
五十一、下宿屋と芸者	186
五十二、特別研修	192

五十三、昭和十九年末から二十年初め	195
五十四、昭和二十年二月から五月	200
五十五、一〇〇一厚木航空隊着任	204
五十六、要務飛行	207
五十七、試験飛行	211
五十八、上海に二億五千万円運ぶ	212
五十九、輸送指揮官	217
六十、北海道に転進	220
六十一、終戦	222
六十二、復員	225
六十三、ミドリ十字の飛行機	226
六十四、終戦要務	230
六十五、解散	234

一、夢枕

この話は物心ついた頃、祖母が私に話してくれた事である。

立春は過ぎたとはいえ、氷つくような寒い晩であった。田舎の夜は早い、祖父と祖母は二人暮らしである。子供はそれぞれかたづいて外に出ている。この家は明治の初め頃建てられたもので、大きな家である。座敷が八畳の間四部屋、続きに六畳の間四部屋、これを襖で区切っている。襖を外せば大広間になる。その下に土間があり、入り口の土間には唐臼がある。その奥に勝手場、くど、囲炉裏がある所、風呂場と続き、その横後ろには漬物桶のある部屋、六間／＼三間の蔵があるという大きな家である。そんな広い家に三つの裸電球がついている。電球は十燭光で終夜灯である。大正の終わり頃は何処もそんなものだった。

二人は晩御飯を済まし、表の八畳の間の炬燵で暖をとっていた。やがて二人は深い眠りに入ってしまった。ふと自転車の音がした。積はよく自転車で帰ってくるから今日も帰ってきたのだなと思っただが、はつきりとは目が覚めていなかった。

ふと襖を開けると、「帰ったよ」と言ったので目が覚めた。目が覚めて初めて現実に帰った。「今晚は、今晚は」と言う声のはつきりと聞こえた。

自転車の音も現実のものであった。土間の大戸を開けると、そこに電報配達の人が立っており、



母に抱かれる1歳の時

に川尻で天然痘に感染して死んだ人の葬式にお参りした。そしてその晩から高熱を出し、天然痘と診断された。その後隔離病舎に入院していたが、数日で死亡したのである。この頃、第一次大戦に参戦して日本は戦勝国になり、兵隊が川尻にあがって本隊に帰ってきたのだ。大陸から天然痘もち帰ったという事であった。

その後、積が死亡して十二日目に子供が生まれたのである。祖母はその時の事を話してくれ、積が夢の中で死んだ事を教えてくれたのだと、私に話してくれたのである。これが夢枕というのである。

「電報です」と言って電報用紙をわたした。

祖父と二人が暗い電球の下で電文を読んだ。

「ツモル シス ヨロシクタノム ヤスヨ」と言う短い電文であった。何も知らない二人は動転してしまった。

積が病気であるのを知らなかった二人はどうしてよいのか分からなかった。その頃電話があるわけではなく、連絡をする事も出来ない。積は数日前

二、戸主

父が亡くなって色々な問題が起こった。祖父、宗太郎は次男、積に相当期待を持っていたようである。祖父は国鉄八本松駅が出来る時、川上村の村長をしていた。駅を作る時、いろいろお金を使い、莫大な借金をしたらしく、田畑も売り、財産も差し押さえられるほどになっていた。その時、積を分家させ財産を分与して難を逃れようとしたらしい。借金の整理がつき、積を分家させ、土地をわけ、一家をつくらせた。積は一家の長として独立する事になった。その頃、駅の周りは殆ど財満の土地だったと聞いている。それを手放す事で決着をつけた。

そんな時、積が死を迎える。母、安代は産み月で主人の葬儀にも出られないまま、生まれる子供をどうするか迷った。母はまだ二十五歳の若さで、財満家に留まる事に躊躇した。子供は生まれながら財満家、分家の戸主である。この間、積の弟、積三と再婚させたらという話ができて、母は迷ったが、納得行かないまま、竹原の実家に子供を連れて帰った。

母の実家には兄夫婦とその長男、中学生の弟、腹違いの妹の女学生、母の父がまだ健在であり、代々味噌の作り酒屋で、使用人二人の住み込みという大所帯であった。母は自分の手元に置いて育てたいと思った。実家に赤子を連れて帰り、兄夫婦のところと同居するのは肩身が狭い思いをしたであろう。子供は物心が着いた頃、財満家に帰すと言う約束であったらしい。財満家は分家の戸主

である子供は祖父母が育てようと考えていたようである。

母は女子師範学校を出ていたので竹原の小学校に就職した。結婚する前にこの学校に勤めていたので同僚の先生も親切にしてくれるので楽しく勤められた。母は子供を自分一人で育てようと思ったが、財満家の戸主である為、帰さなければならぬと思った。家と家の交渉もあったようだが、結局、子供を四歳まで育て財満に帰すという事になった。

三、父の死

父、積は財満家次男として生まれ、広島師範学校を卒業、安芸郡熊野跡小学校に就職し、三十歳の頃、賀茂郡川尻小学校に転勤した。その後、母安代と結婚した。

母は三原女子師範学校を卒業後、賀茂郡竹原小学校に勤めた。縁あって結婚、そして広に新居をもった。父は三十歳の時に結婚したのだ。それまでは山の中の小さな熊野跡小学校にいたが、賀茂郡の南、川尻学校に転勤し、結婚して、広の大新開の家を借りて新婚生活が始まった。

母は広小学校に勤める事になった。父は広から川尻まで自転車通勤した。広から川尻まで十五キロ以上の道のりである。その頃は交通の便が悪く、歩くか自転車で通うしかなかった。それが平地なら良いが、広、仁方、川尻と道はあるが平地ではない。交通機関は汽車も自動車もない頃であ

る。それでも広島―広間は鉄道がついていた。広と仁方の間に峠があり、仁方と川尻の間に少し長い峠がある。自転車に乗っては登れない急な峠である。自転車で通うのは大変だったと思う。その頃、天然痘が流行し、天然痘にかかり死ぬ人が多く出た。天然痘は高熱が出て体の全体に吹き出物が出来て死ぬ病氣らしい。

その頃、第一次世界大戦が終わり、日本は戦勝国になり、支那の青島に出征していた五師団、福山四二連隊の兵隊が川尻に上陸したという事であった。その時、大陸から天然痘を持ち帰り、海岸の町に伝染したのだろうといわれていた。父は川尻の小学校に勤めていたので、父兄の所に死亡者が出て、葬式が行われればお参りしなければならない。

二月の初めに葬式があり、お参りしたのである。その日は特に寒い日で、晩に帰ると急に熱が出たので、医者に診てもらおうと伝染病の天然痘と診断された。すぐに隔離病舎に入院される事になった。隔離病舎は広の福浦という所にあり、皆が、「あそこに入ったら出られはしまい」と噂をするので母は慌てた。

その頃、電話もなく、どこにも連絡が出来ないまま二、三日が過ぎてしまった。医者からも詳しい病状を聞けないまま何日か過ぎていった。母も一人で悩むだけでどうする事も出来なかった。そのうち病状が次第に悪くなり死んでしまった。誰にも見てもらえないまま死んでしまった。死んだ知らせを電報で知るしかなかった。電報を貰った祖父母も驚き慌てたであろう。それから親戚に電報を打

ち通知すると同時に広に行かなければならない。広に行くにも山陽本線で海田まで行き、呉線で広まで汽車で行かなければならない。それでも何とか広に着いたが、どこに住んでいたのか分からない。人から色々聞きながらやっと住所を突き止めた。事情を聞くと伝染病だから葬儀も出来ないという事で、むこうの言うままに火葬を済まし遺骨を持ち帰ったのである。

祖父は酒を飲みながら私にその事を涙流しながら話してくれた。私もその話を聞きながら父の最後がこんなに哀れだったのかと思いつながら聞いていた。父は私が生まれる十二日前に死亡、三十三歳であった。

四、狐に騙された話

昭和の初め頃の事である。こんな馬鹿げた事があったのかと思うような話である。夏になり、晩飯が済むと中庭に涼み台を出し、祖父母、男の手伝い人、私と皆集まって涼みがてら色々な話が出た。その時の話で、祖母が狐に騙された話をしたのが印象に残っている。

祖母が若い時、志和堀の実家に乳飲み子を背負い、帰る時の話である。実家を出るのが遅くなり、八本松の峠に入るまでに日がどつぷりと暮れて寂しがりながらとぼとぼ歩いてきた。この峠を越せば家に着くと思いつながら足を速めていた。その時、二、三十メートル前にポーと明かりがついた。

その明かりに追い付こうとして足を速めたが、追い付かない。八本松の峠を過ぎてもその明かりはほとんど前に進むが、どうしても追いつけない。やがて人家のある近くでポーと消えたので、この時はじめて狐に騙されたのではないかと気付き、家に走りこんだと言う話だった。本当に狐はいるのかなと思った。そんな話や狐の嫁入りの話をしてくれた。ずーと向うの小川の土手に狐火が点り、点いたり消えたりするのは狐の嫁入りである。そんな時、狐はそばに居るといふ話もしてくれた。

百姓の手伝いや、日常の細々した仕事をする為に泊り込みで働いてくれる男仕が何かの用事をいつかって村役場に出て行った。私を相手に時々話してくれる気の良い兄さんでもあった。カズイチと呼んでいた。その日の朝、村役場に行く用事があり出ていった。その頃の役場は米満という所であり、森の中で昼間でも寂しい所であった。朝家を出たのに昼になっても帰らない。

祖母は、「腹がすいたろうにどうしよるんかの」と心配していた。

待てども帰ってこない。とうとう夜になっても帰ってこなかった。

明くる朝、祖父も心配になったが捜しようがない。一日中待ったが帰ってこない。その頃、電話もない時で、役所に問い合わせ事も出来ない。帰ってくるのを待つしか方法がない。

その日の夕方、近所の人が、「お宅の男仕が米満の山の中で寝ていたのを見た」と教えてくれた。その日、一日待ったがその晩も帰らなかった。明日は搜索願いを出そうかと祖父が言っていた。

子供ではない、きっと帰ってくると心配しながらその晩も寝た。